長野県
## 長野高校

### 2年生後半からの切り替え

# 基礎学力の定着と意識の切り替えで2年生秋から受験生に

◎2010年に創立111周年を迎えた伝統校。「至誠一貫」「質実剛健」「和衷協同」を校訓とし、自己実現と社会貢献が出来る人材の育成を目指す。毎年、多くの生徒が難関国公立大に合格。一方で、吹奏楽や陸上、放送、ECC（英語）などのクラブが全国大会に出場。

**設立**
1899（明治32）年

**形態**
全日制・定時制／普通科／共学

**生徒数**
1学年約290人（1年生は約320人）

**10年度入試合格実績（現浪計）**
国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、千葉大、東京大、横浜国立大、信州大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大などに186人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、中央大、法政大、明治大、立教大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ495人が合格。

**住所**
〒380-8515 長野県長野市上松1-16-12

**電話**
026-234-1215

**Web Site**
http://www.nagano-c.ed.jp/naganohs/

### 変革のステップ

**背景**
◎大学入試に向けた生徒の意識の切り替えが遅く、入試の時期に学力のピークを合わせることが難しかった
STEP 1

**実践**
◎模試や考査の徹底的な振り返りで基礎学力を定着させ、学部研究や学年通信、面談を効果的に使い受験意識を醸成
STEP 2

**成果**
◎多くの生徒が2年生後半から受験に向けた意識の切り替えが出来るように。より高い志望を目指す生徒も増加
STEP 3

## 「中だるみ」を前提として下位層をつくらない指導をする

長野県長野高校は、旧制中学校の流れをくむ県下有数の進学校で、例年、国公立大に180～200人、東京大にも10人前後が合格する。部活動も盛んで、全国大会常連の吹奏楽班（同校では部活動を班活動と呼ぶ）をはじめ、野球班や合唱班などの部が全国大会への出場経験を持つ。

多くの生徒が、部活動はもちろん、3年生7月の文化祭まで学校行事に全力投球する。こうした生徒の気質は、良き伝統として学校に活気をもたらしている半面、受験へ向けた学習のスタートを遅くさせている。進路指導主事の松原雄一先生は、それが悩みの種だったと話す。

「班活動や文化祭を一生懸命に取り組む経験が、受験にプラスになることは確かです。しかし、3年生の9月になってから本格的に受験勉強を始めていたのでは、入試本番に学力のピークを合わせることが難しくなります。2年生後半には受験生としてスタートを切れるよう、生徒の意識を早めに切り替えさせる必要を感じていました」

ただし、2年生後半に受験への意識の切り替えが出来たとしても、その時期までに十分な基礎学力が付いていなければ、志望校合格は難しい。同校の取り組みの特徴は、2年生後半だけ

に着目するのではなく、1年生後半から2年生秋までの中だるみの時期に着目し、成績下位層をつくらない指導を徹底した点にある。

「例年、1年生後半から約1年間にわたり、生徒の学習意欲が下がる中だるみの時期が本校で課題となっていました。中だるみを解消できればよいのですが、現実的には難しい。ならば中だるみを前提に、その影響を最小限に抑えようというのが我々の発想です。一時的に学習時間が減っても、基礎学力や学ぼうとする意欲があれば、生徒は必ず学習に戻ってきます。1、2年生で成績を低下させない指導を徹底することによって、2年生後半に生徒の意識をスムーズに受験へと切り替えられるのではないかと考えました」（松原先生）

長野県長野高校
**松原雄一** Matsubara Yuichi
教職歴25年。同校に赴任して6年目。進路指導主事。「当たり前のことを高いレベルでやってみよう」

長野県長野高校
**倉島敏明** Kurashima Toshiaki
教職歴29年。同校に赴任して6年目。進路指導部。「随処に主となれば、立処皆真なり」

長野県長野高校
**永井俊彦** Nagai Toshihiko
教職歴27年。同校に赴任して6年目。教務部。「Where there's a will, there's a way.」

長野県長野高校
**佐藤健二** Sato Kenji
教職歴26年。同校に赴任して6年目。同窓会。「人間万事塞翁が馬」

## 学年通信や個人票を使い 模試や定期考査を徹底的に振り返る

成績下位層をつくらないため、同校が重視したのが模試や定期考査の振り返りである。

模試は振り返りの機会を2回設けている。1回目は、模試受験後に行う自己採点だ。生徒に自己採点をさせる一方、全教科の教師で問題を分析し、解法、今後に向けた学習方法などを学年通信に掲載する（P.18図）。更に、希望者を集めて各教科1時間の解説講座を開き、難問を中心に解法の解説、学習の仕方などを指導する。

2回目は、模試結果の返却後だ。個人成績票と答案が返却された時を見計らい、小問ごとの全国平均正答率を示した資料を学年通信に掲載。基礎の定着の重要性を認識させ、確実に得点できるようにさせるのが狙いである。どの問題に正解すれば志望校の合格ラインに届くのかを素点で確認させ、基礎問題での取りこぼしを重点的に復習させる。

また、すべての模試において、前回の模試よりも5ポイント以上偏差値が上がった生徒、下がった生徒の情報を学年団で共有する。

「成績が上がった生徒に対しては、更に高い目標を目指して頑張れるように励ます。一方、下がった生徒には、教科担当者がその原因を分析し、効果的な学習方法をアドバイスしています。生徒の成績の変化は、学年全体で把握し、対応に当たることが重要だと考えています」（松原先生）

定期考査では、全教科の得点や度数分布、順位の変動を示した個人票を配付する。特徴は、得点や順位の変動に一喜一憂して終わることのないよう、個人票に反省や感想を書く欄を設けていることだ。勝因・敗因を事細かに書き込む生徒もいるが、「駄目だった」の一言で終わらせてしまう生徒もいる。後者の生徒に対しては、面談などを通して、何が問題なのか、今後どうしていきたいのかを問い掛け、具体的な改善策を考えさせている。

また、生徒の反省文の中から、他の生徒の共感を呼びそうなものを、学年通信に掲載している。選ばれるのは前向きなコメントばかりではない。「勉強しているのに出来ない。これが実力なのか」といった煩悶や苦悩が赤裸々に書かれた文章も載せている。

「前向きな文章ばかりを載せても、教師の意図を見透かされるだけです。皆、同じ苦しみを持って頑張っているということを分かってほしいと考えています」（松原先生）

## 2年生後半に学年全体で苦手分野の克服に取り組む

2年生11月には「不得意分野克服講座」を開く。本格的な受験勉強が始まる前に苦手科目・分野を克服し、5教科の基礎を固めさせようというのが狙いだ。月2回、生徒全員が受講する「土曜セミナー」の時間を使い、5教科の担当教師が生徒の苦手分野、伸ばしたい分野に応じてそれぞれ2、3の講座を開設。生徒は各教科1講座を選択し、60分×3コマの講義を受講する。

講座は基礎的な内容が中心だが、教科によっては発展的な内容を扱う場合もある。例えば数学では、ベクトルや三角関数など弱点分野に重点を置いた講座と、教科書では扱わないが難関大でしばしば出題される整数問題の講座を設けた。数学科の永井俊彦先生は、整数講座での生徒の様子を次のように話す。

「希望制のためか、生徒の意欲はとても高く、特に整数問題には、東京大や京都大を志望する生徒が積極的に取り組んでいました。教師が一方的に教え込むのではなく、ゼミのような形式で、生徒と一緒に一つひとつ難問を攻略していくプロセスは、教師にとっても刺激的でした」

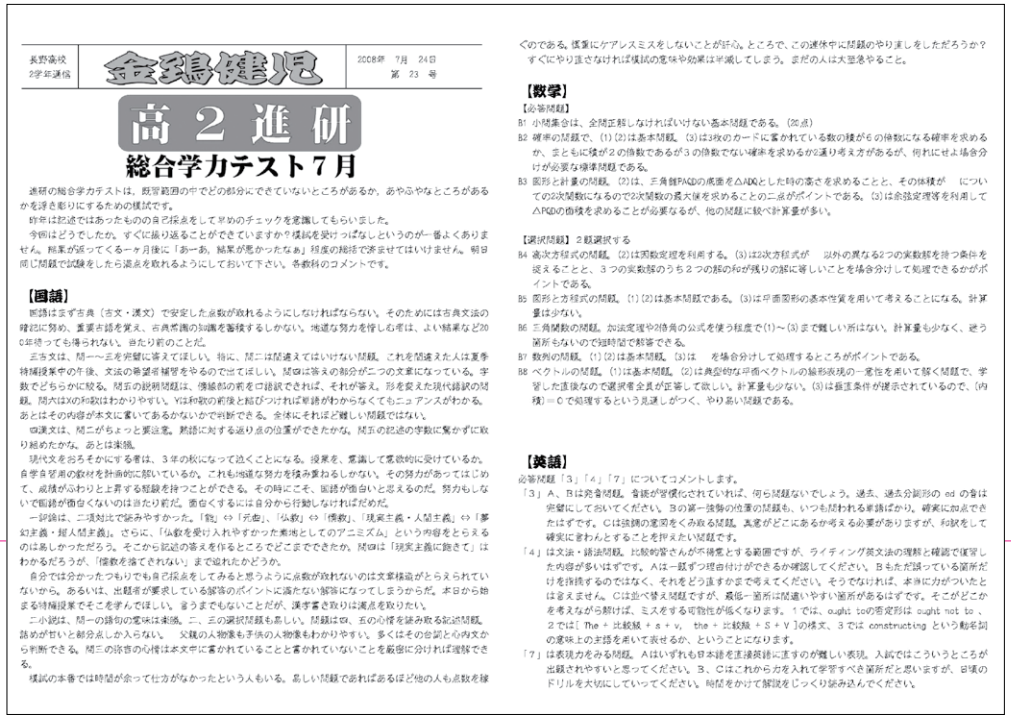
2年生末は、難関大対策講座など成績上位層向けの補講が開始される時期でもある。この時期に生徒全員に苦手分野克服に取り組ませているということからも、同校がいかに基礎学力の定着を重視しているかがうかがえる。

一方、授業の進度や内容について妥協しないのも、同校の特徴だ。例えば、英語は1年生12月に1年生の学習内容を終わらせる進度で進め、その上、月2冊程度のサイドリーダーを課している。英語科の佐藤健二先生は次のように話す。

「生徒には、『先輩も同じことをしてきたから、自分たちにも出来る』というプライドがあります。授業では相当負荷をかけていると思いますが、そう簡単に諦めてしまう生徒たちではありません。我々教師が生徒の力を信じるからこそ、生徒も我々の期待に応えようとするのです」

もちろん、一方的に負荷を与えるだけではない。ついてこられない生徒には、補習や追試でしっかりと支援する。成績上位層を育てて学年全体の牽引役にすると共に、成績下位層をフォローして学力を支える。この歯車が噛み合ってこそ、2年生後半における意識の切り替えがスムーズに行えるのである。

図　「学年通信」2008年2学年・第23号



長野高校 2学年通信　金鶏雄児　2008年 7月 24日 第 23 号

高２進研

総合学力テスト７月

連研の総合学力テストは、既習範囲の中でどの部分ができていないところがあるか、あやふやなところがあるかを浮き彫りにするための模試です。

昨年は記述ではあったものの自己採点をしてミのチェックを意識してもらいました。

今回はどうでしたか。すぐに振り返ることができていますか？模試を受けっぱなしというのが一番よくありません。結果が返ってくる一ケ月後に「あーあ、結果が悪かったなぁ」程度の総括で済ませてはいけません。明日同じ問題で試験をしたら満点を取れるようにしておいて下さい。各教科のコメントです。

【国語】

国語はまず古典（古文・漢文）で安定した点数が取れるようにしなければならない。そのためには古典文法の暗記に努め、重要古語を覚え、古典常識の知識を蓄積するしかない。地道な努力を惜しむ者は、よい結果など200年続いても得られない。当たり前のことだ。

三古文は、問一～三を完璧に答えてほしい。特に、問二は間違えてはいけない問題。これを間違えた人は夏季特補授業中の午後、文法の補習を受けてもらいたい。問四は答えの部分が二つの文章になっている。字数でどちらかに絞る。問五の説明問題は、傍線部の前を口語訳できれば、それが答え。形を変えた現代語訳の問題。問六は×の和歌はわかりやすい。Yは和歌の前後と結びつければ単語がわからなくてもニュアンスがわかる。あとはその内容が本文に書いてあるかないかで判断できる。全体にそれほど難しい問題ではない。

四漢文は、問二がちょっと要注意。熟語に対する返り点の位置ができたかな。問五の記述の字数に驚かずに取り組めたかな。あとは楽勝。

現代文を当たりそのものにする者は、３年の秋になって泣くことになる。授業を、集中して意欲的に受けているか。自学自習用の教材を計画的に部いているか。これも地道な努力を積み重ねるしかない。その努力があってはじめて、成績がふわりと上昇する経験を持つことができる。その時にこそ、国語が強い味方と思えるのだ。努力もしないで国語が強くなりのは当たり前だ。面白くするには自分から行動しなければだめだ。

一評論は、二項対比で読みやすかった。「物」⇔「元型」、「仏教」⇔「懐教」、「現実主義・人間主義」⇔「夢幻主義・超人間主義」。さらに、「仏教を受け入れやすかった素地としてのアニミズム」という内容をとらえるのは易しかっただろう。そこから記述の答えを作るところでどこまでできたか。問四は「現実主義に飽きて」はわかるだろうが、「懐教を強できれない」まで辿れたかどうか。

自分では分かったつもりでも自己採点をしてみると思うように点数が取れないのは文章構造がとらえられていないから。あるいは、出題者が要求している解答のポイントに適合しない解答になってしまうからだ。本日から始まる特補授業でそこを学んでほしい。書うまでもないことだが、漢字書き取りは満点を取りたい。

二小説は、問一の語句の意味は楽勝。二、三の選択問題も易しい。問題は四、五の心情を読み取る記述問題。詰めが甘いと部分点しか入らない。　父親の人物像も子供の人物像もわかりやすい。多くはその台詞と心内文から判断できる。問三の陳言の心情は本文中に書かれていることと書かれていないことを厳密に分ければ理解できる。

模試の本番では時間が余って仕方がなかったという人もいる。易しい問題であればあるほど他の人も点数を稼ぐのである。慎重にケアレスミスをしないことが肝心。ところで、この連休中に問題のやり直しをしただろうか？すぐにやり直さなければ模試の意味や効果は半減してしまう。まだの人は大至急やること。

【数学】

【必答問題】

B1 小問集合は、全問正解しなければいけない基本問題である。（20点）

B2 確率の問題で、(1)(2)は基本問題。(3)は3枚のカードに書かれている数の積が6の倍数になる確率を求めるか、または積が2の倍数であるが3の倍数でない確率を求めるか2通り考え方があるが、何れにせよ場合分けが必要な標準問題である。

B3 図形と計量の問題。(2)は、三角錐PABの底面を△ABQとした時の高さを求めることと、その体積が　についての2次関数になるので2次関数の最大値を求めることの二点がポイントである。(3)は余弦定理等を利用して△PQBの面積を求めることが必要なるが、他の問題に較べ計算量が多い。

【選択問題】２題選択する

B4 高次方程式の問題。(2)は因数定理を利用する。(3)は2次方程式が　以外の異なる2つの実数解を持つ条件を従えることと、３つの実数解のうち２つの解の和が残りの解に等しいことを場合分けして処理できるかがポイントである。

B5 図形と方程式の問題。(1)(2)は基本問題である。(3)は平面図形の基本性質を用いて考えることになる。計算量は少ない。

B6 三角関数の問題。加法定理や2倍角の公式を使う程度で(1)～(3)まで難しい所はない。計算量も少なく、迷う箇所もないので短時間で解答できる。

B7 数列の問題。(1)(2)は基本問題。(3)は　を場合分けして処理するところがポイントである。

B8 ベクトルの問題。(1)は基本問題。(2)は典型的な平面ベクトルの線形表現の一意性を用いて解く問題で、学習した直後なので選択者全員が正答して欲しい。計算量も少ない。(3)は垂直条件が提示されているので、(内積)＝0で処理するという見通しがつく、やり易い問題である。

【英語】

必答問題「3」「4」「7」についてコメントします。

「3」A、Bは発音問題。音読が習慣化されていれば、何ら問題ないでしょう。過去、過去分詞形の ed の音は完璧にしておいてください。Bの第一強勢の位置の問題も、いつも問われる単語ばかり。確実に80点できたはずです。Cは強調の倒置をくみ取る問題。真実がどこにあるか考える必要がありますが、利敵をして確実に書わんとすることを押えたい問題です。

「4」は文法・語法問題。比較的皆さんが不得意とする範囲ですが、ライティング英文法の復習と確認で復習した内容が多いはずです。Aは一語ずつ理由付けができるか確認してください。Bもただ誤っている箇所だけを指摘するのではなく、それをどう直すかまで考えてください。そうでなければ、本当に力がついたとは考えません。Cは並べ替え問題ですが、最低一箇所は間違いやすい箇所があるはずです。そこがどこかを考えながら解けば、ミスをする可能性が低くなります。１では、ought to の否定形は ought not to 、２では［ The + 比較級 + s + v,　the + 比較級 + S + V ］の構文、３では constructing という動名詞の意味上の主語を用いて表せるか、ということになります。

「7」は表現力をみる問題。Aはいずれも日本語を直訳風語に直すのが難しい表現。入試ではこういうところが出題されやすいと思ってください。B、Cはこれから力を入れて学習すべき箇所だと思いますが、日頃のドリルを大切にしていってください。時間をかけて解説をじっくり読み込んでください。

学年通信は年50号ほど発行。行事の報告や模試の分析などタイムリーな情報を提供する　＊学校資料をそのまま掲載

## 「学部学科研究会」で学びへの意欲を高める

基礎学力の定着を図る一方で、意識の切り替えも並行して行う。2年生の6月と9月に行う「学部学科研究会」では、地元の信州大を中心に全国の難関大から大学教員を招き、最先端分野に関する講義を、質疑応答を伴う分科会形式で実施する。生徒は希望分野に応じて受講する。これは、志望校選択に向けて学部学科の理解を深めると共に、学習意欲が下がりやすい夏休み前後に受験への意識を高めるのが狙いだ。進路指導部の倉島敏明先生は、研究会を次のように評価する。

「一方的な講義形式ではないため、大学教員との距離が近く、活発な質疑応答が行われました。中には、『研究生活は経済的に苦しくありませんか』といった現実的な質問をする生徒もいました。具体的な大学像を描く上で大きな刺激になったようです」

永井先生は研究会実施後、数学に対する生徒の取り組み方が変わったと指摘する。

「数学は、学んでいることが将来どのように役立つのか分かりづらい教科です。最新の研究を通して、ベクトルや微積分が社会でどのように生きるのかを知ることによって、より前向きに授業に取り組めるようになったようです」

同校では、こうした体験がより高い志望を目指すきっかけになることを期待する。

「生徒は高校入学時点であまり大学を知りません。そのため、1年生の段階では、3分の1の生徒が信州大を志望校に挙げるのが現状です。地元の大学しか知らない生徒が、他の地域や難関大にも目を向けるようになってほしいと思います」（松原先生）

## 模試、学年通信、面談で畳みかけ意識を切り替えさせる

生徒の意識の切り替えを図るに当たり、特に重視する時期は2年生の10月に行う研修旅行明けである。この時期は、模試が初めて5教科で行われることもあり、大学入試に向けた意識を醸成する絶好のチャンスだからだ。

生徒の意識付けを図るため、同校が活用しているのが、前述の学年通信だ。模試直前には5教科模試を受ける意味や心構えを説き、終了後には生徒の志望や成績を集計し、各大学の志望者の人数や判定まですべて公表する。他の生徒がどのような大学を目指しているのかを見せることで、志望校選択へ向けた意識を高めるのが狙いだ。更に、学年全体の学習時間の推移をグラフで示し、「この学習時間で志望を実現できるのか」ということを厳しく問い掛ける。

模試受験後の11月中旬には面談週間も設けている。担任が一人ひとりの志望を確認し、受験に向けた覚悟を持つよう促すのである。

このように、模試や学年通信などの集団指導と、面談による個別指導を連動させることで、多くの生徒が2年生後期の後半を「3年生0学期」としてスタートが切れるようになるという。

「班活動や行事は、3年生の最後までやり遂げさせるのが本校の伝統です。3年生の5月になればインターハイ予選が始まり、7月には最後の文化祭があります。3年生の夏までの間で勉強に打ち込めるのは、2年生後期の後半だけだと伝えています。受験生としての自覚も芽生え、研修旅行前とは打って変わって、授業への集中力も高まっていくのを感じます」（倉島先生）

今後は、1年生の早い段階に学年縦断で行う進路行事を増やしていく予定だ。既に、1、2年生合同の東京大学セミナー、1～3年共通の医学科研究会や大学別研究会などを行った。上級生の姿を見せることで、下級生にも意識付けを図っていく考えだ。

「本校の取り組みは、どれも珍しいものではありません。本校が大切にするのは、生徒とコミュニケーションを取りながら、活動を一つひとつ丁寧に行うことです。生徒が意識の切り替えのきっかけを見つけられるような指導の在り方を、これからも模索していきたいと思います」（松原先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2009年9月号指導変革の軌跡「東京都・私立錦城高校」など
▶▶▶ http://benesse.jp/berd/ → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）